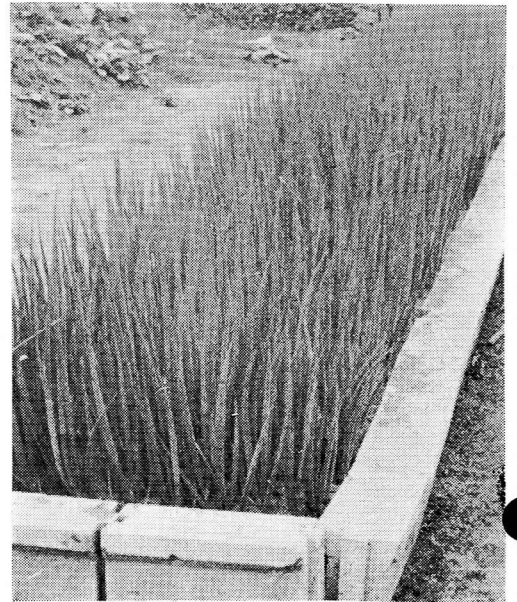


ネギの

もみから利用による

簡易栽培

道立道南農試園芸科 沢田 一夫



ネギの栽培の状況

ネギは古くから主要な野菜で、多くの人々に親しまれ、肉料理などには欠かせないものの一つとなっている。ネギはユリ科に属し、タマネギとはもちろん、ニラ、ニンニク、アスパラガスなども同属である。だからニラ油を主成分とした辛味成分を含むので、めん類の薬味としても利用されるが、調理中涙を流す人が多い。

ネギの栽培適地

ネギは元来あまり暑い気候を好まず、冷涼な気候を好む作物である。だから、培土による軟白で白い部分の長いネギの出荷は、秋から冬にかけて多くなっており、関東から北の寒い地方に多く栽培されている傾向があり、関西以西では培土せず主に葉の部分を食べる型のネギが多く栽培されているようである。

北海道の風土は、夏でも比較的涼しく、また土性的にも火山性の軽い土壌が多いので、条件としては冬の積雪期を除き、比較的好条件下にあるといっても良い。だが、北海道のネギの栽培現況は、昭和三十九年の統計によると約一千鈔あって、全国でもその栽培面積は少ない方ではないが自家用に栽培する人が多く商品化率が低いため北海道全体の消費量の三〇%弱しか自給出来ず七〇%強は府県から移入しているありさまである。(第一表)

もみから利用による簡易軟白栽培法

ネギは比較的乾燥に強く、他の野菜に比べると丈夫な作物のため、案外投げやりな栽培が行なわれており園芸作物としては、原始的な栽培が行なわれていて、定植、培

土、収穫と重労働が多く、栽培期間も非常に長い。そのうえ、定植時の苗と収穫時のネギの重量の差は、他の野菜に比べると小さく本畑での生長率は良くない。

そこで、なんとかネギの栽培を簡単にし、かつ生育を早めて、できるだけ価格の高い時期に出荷できるように栽培法を目的に試験を続け、ほぼ目的が達せられたので、その要点を紹介する。

もみから利用するネギの簡易軟白栽培の大きな特長は、なんとといっても定植を省略して、播種から収穫まで同じ畑を用いることと、培土をやめ、もみからを使って簡易軟白を行なうことの二点であろう。定植を省くから、植えたいみもないし、培土による根のいたみや土の圧迫から解放されることになり、ネギ本来の能率的な生育をすることになる。

第1表 道内における野菜の需給状況 (昭和39年)

| 品目 | 道内生産量 | 一般消費量(都市) | | | |
|--------|--------|-----------|--------|--------|-------|
| | | 道産出回り量 | 移入量 | 計 | 自給率 |
| ネギ | 8,939 | 3,251 | 8,468 | 11,719 | 27.7% |
| ホウレンソウ | 5,501 | 2,111 | 5,801 | 7,926 | 26.6 |
| トマ | 15,830 | 7,944 | 3,079 | 11,023 | 72.0 |
| イチゴ | 4,510 | 2,712 | 290 | 3,002 | 70.3 |
| トマト | 86,273 | 18,957 | 14,375 | 33,332 | 56.9 |
| ハクサイ | 43,459 | 22,641 | 4,668 | 27,309 | 82.9 |
| カブ | 18,887 | 21,599 | 8,904 | 30,503 | 70.8 |
| アスパラ | 8,840 | 360 | — | 360 | 100.0 |

品種

ネギの品種は、(1)葉鞘部に培土して軟白する根深ネギ(千住系)、(2)分けつが多く、培土しないで葉を利用する葉ネギ(九条系)、(1)、(2)の中間型で越冬性の強いネギ(加賀系)の三群に大別される。この栽培に向く品種の条件はまず生育が早くて品質が良くなければならぬ。

葉ネギの九条系品種は、早生型であるが、別名「千本ネギ」ともいわれ、分けつが多いため、十分な太さにならず、軟白するとかえって減収する。千住系の根深ネギは、

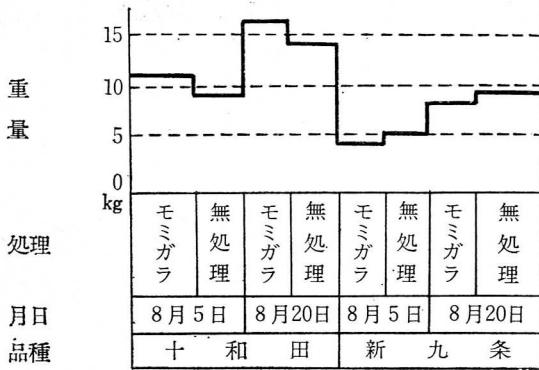
第2表 1m² 当たり収量 (昭和41年道南農試)

| 区 別 | 8月5日 | | 8月20日 | | |
|--------------|----------|---------|-------|---------|-------|
| | 収 量 | 割 合 | 収 量 | 割 合 | |
| 千住系 (十和田) | 軟白(モミガラ) | kg 11.0 | % 128 | kg 16.9 | % 116 |
| | 無 処 理 | 8.6 | 100 | 14.6 | 100 |
| 九条系 (新九条) | 軟白(モミガラ) | 4.7 | 98 | 7.6 | 88 |
| | 無 処 理 | 4.8 | 100 | 8.6 | 100 |

播種は普通栽培のネギの育苗と同様の要領で床播きにする。床幅は一畝前後が適当で、あまり広くすると除草、間引き、その他の管理がやりづらくなる。密度は収量、品質、などを考慮すると、十五×五彙、(一平方畝当たり一三三本)位が適当のようである。(第三表) もちろん点播で、最後に間引いて一本立てにする。だからあまり厚播きにしないように心がけなくてはならない。種子の良し悪しにもよるが、一

播種法

もみがらによる簡易軟白により、白色部の昇りも良好で長くなり、品質もすぐれ、増収する。(第二表) なかでも早生の「石倉根深一本」や、色、縮まりの良い「金長」などが適している。



第1図 1m² 当たり収量比較図

軟白はもみがらを用いて行なう。ネギが十分生育したら、床の回りに高さ三〇センチ

もみがら利用の軟白法

〇彙程度やっている。

施肥は普通栽培での育苗となら変わりではないが、もみがらを施してからの追肥ができませんので、軟白前に十分肥料を吸収させて、できるだけ大きくして軟白に備えておかなければならない。道南農試では播種前に一平方畝当たり硫酸一八彙、過石五五彙、硫加一八彙を施しておいて、一平方畝当たり五〇彙づつ三回、合計一五〇彙程度やっている。

施肥量

カ所五〜六粒も播けば十分で、種子の節約にもなる。

第3表 収穫時の生育と収量 (昭和42年 道南農試)

| 項 区 目 別 | 7月24日 (20日目) | | 8月12日 (40日目) | | | | | | | | |
|-----------|--------------|--------|--------------|---------|---------|-------|--------|----------|---------|---------|------|
| | 1平方畝当たり | | 1株 当たり | | | | | 1平方畝 当たり | | 調 整 | |
| | 全 重 | 調整重 | 全 重 | 全 長 | 白色部の長さ | 葉 数 | 茎 径 | 本 数 | 全 重 | 調整重 | 歩 合 |
| ① 15×3 cm | kg 11.1 | kg 9.5 | kg 70.0 | kg 88.8 | kg 30.5 | 枚 4.3 | cm 1.4 | 本 221 | cm 15.5 | kg 12.6 | % 81 |
| ② 15×5 | 7.1 | 5.8 | 132.0 | 87.5 | 29.0 | 5.0 | 1.7 | 124 | 16.4 | 13.0 | 79 |
| ③ 20×3 | 8.8 | 7.4 | 92.9 | 90.4 | 30.7 | 5.2 | 1.7 | 161 | 15.0 | 12.1 | 81 |
| ④ 20×5 | 8.0 | 6.8 | 167.0 | 96.0 | 28.8 | 5.6 | 1.8 | 96 | 16.0 | 11.6 | 73 |

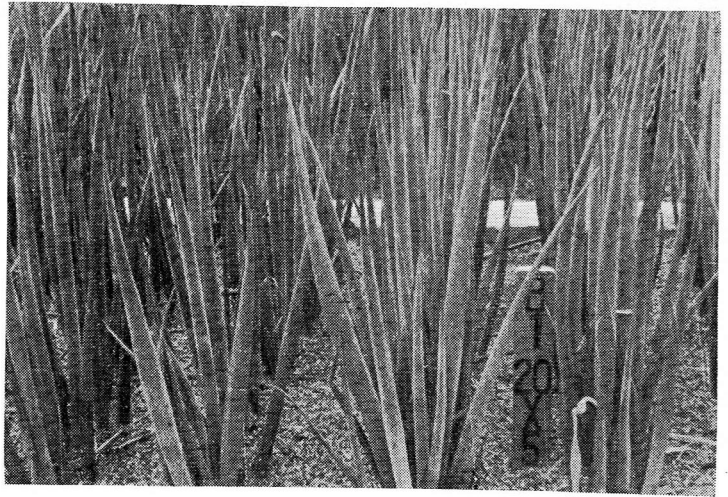
らしいのワクを作る。写真ではブロックを用いているが、ブロックに限らず、もみがらささえならければなんでも結構で、板切れや保温用のトンネルに用いたポリカビニールを両脇に地上三〇センチぐらいまで下げ、それをもみがらのささえに使用しても

軟白が完了すると収穫だが、作業は簡単で、あらかじめフォークでネギの根を浮かしておき、手で引き抜けばよいわけである。天候が良くもみがらの乾いた時の収穫なら土寄せによる軟白とはことなりよ、これがないのでネギを洗う必要もなく品質も良い。一平方畝で一〇〜一五彙の収量を得ることが出来る。長さも三〇彙程度あり、色、

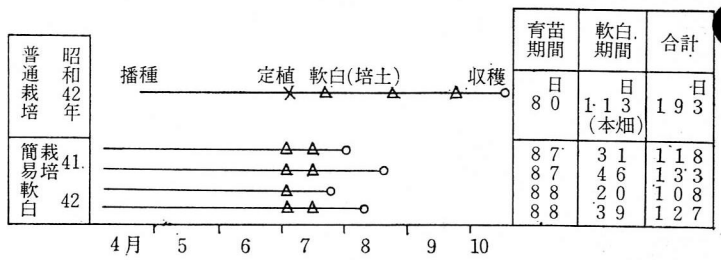
良いわけで、資材費をかけないようにするのがコツである。ワクができたなら、スコップでももみがらを上から静かに落下させる。この際、ネギの葉をいためないように気をつけなければならない。やりづらい場合には補助者が一畝程度の軽い棒切れを二本持ってネギの葉を分け、その間にももみがらを落下させればよい。もちろん補助者は子供でも十分につとまる。

もみがらは、降雨による沈下とネギの生長とで不足しがちになるので、二回施す。一回目のもみがらの量は、ネギの第一葉よりあまり上にはやらないことで、もみがらによる簡易培土によりネギの伸長を助けてやる様心がけなければならない。二回目は一五〜二〇日後に行なう。この時は軟白の仕上げだからネギの生育伸長はあまり考えず白色部を増加させる事を第一に考えて、ネギの新葉の下まで入れてもかまわないようである。一立方畝のもみがらで二〇彙の深さなら約六平方畝、三〇彙の深さでも約四平方畝のネギが軟白できる。軟白の期間は季節によっても多少違うようであるが、大体三〇〜四〇日あれば十分だと思われる。

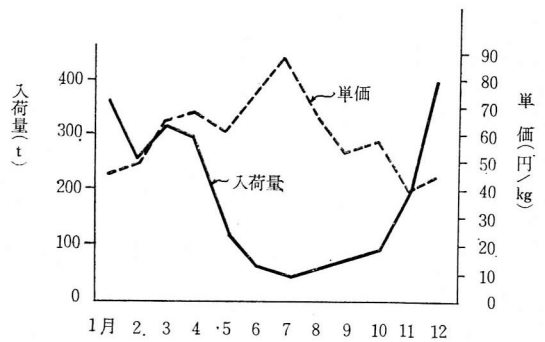
良いわけで、資材費をかけないようにするのがコツである。ワクができたなら、スコップでももみがらを上から静かに落下させる。この際、ネギの葉をいためないように気をつけなければならない。やりづらい場合には補助者が一畝程度の軽い棒切れを二本持ってネギの葉を分け、その間にももみがらを落下させればよい。もちろん補助者は子供でも十分につとまる。



もみがらによる軟白



第2図 生育日数の比較 (道南農試)



第3図 札幌中央卸売市場におけるネギの入荷量と単価 (昭和37~40年の4ヵ年平均)

第4表 1疋当たりの所得 (昭和42年8月13日)

| | | |
|-----|----------------|--------|
| 収量 | 700~1,050 kg | |
| 価格 | 68円 | |
| 粗収入 | 47,600~71,400円 | |
| 生産費 | 種苗 | 700円 |
| | 農薬 | 1,200円 |
| | 肥料 | 400円 |
| | 資材その他 | 5,000円 |
| 計 | 7,300円 | |
| 所得 | 40,300~63,100円 | |

病害虫の防除

病害虫の防除はタマネギ、パエが中心となる。比較密植状態だから、発生した場合には被害が大きくなる可能性が強いのでその防除には特に注意したい。播種時にV・C粉剤を一平方畝当たり九疋を肥料と混合して散布し、発芽後はEPN一〇〇〇〜

一五〇〇倍液を一平方畝当たり一疋の割合で、二週間おきにジョウロで灌注すると良い。

早出して高い収益性

次にもみがら利用によるネギの簡易軟白栽培の生育日数を、普通栽培のネギと比較してみると、普通栽培では播種から定植までに約七〇〜九〇日、本畑でも一〇〇〜一三〇日を要するのが一般的であるが、この栽培法では、ネギが軟白可能な大きさになるのには、ビニールなどで保温しても八〇

日だから、合計でも一一〇〜一三〇日程度で十分であり普通栽培の一七〇〜二二〇日と比較すると六〇〜九〇日短縮される。(第2図)ネギの価格は、出荷量の多い十一月から四月までは比較的安価であるが、出荷量の少ない五月から九月の間では価格も高く、なかでも七月は札幌中央卸売市場で(第3図)は一疋当たり八五円にもなっている。当地方の大野町においてもネギの栽培は多く行なわれているが、早いものでも八月下旬からの出荷が限度で、二年(越年)ネギの出荷が終わったあとの六月から八月下旬までの間はネギが市場に出荷されていない。昭和四十二年の簡易軟白ネギを函館市場に出荷してみたが、七月二十四日で一疋当たり一〇〇円、八月十三

日で六八円の価格を示した。一平方畝当たりの収量は、前述のとおり一〇〜一五疋であるから、八月十三日の収量だと六八〇〜一、〇二〇円の粗収入が得られたことになる。一疋を栽培したとすると、通路その他で約三〇%は利用できないので、残りの七〇%が実面積となり、一疋当たりの粗収入は四万七、六〇〇円〜七万一、四〇〇円の計算になる。生産費は約七、三〇〇円だから所得は四万三〇〇円〜六万三、一〇〇円である。昭和四十二年の場合は高収益性のトマト、キュウリ以上の結果を得た。今回は札幌市場函館市場と道内に出荷することのみを考えて検討して来たが、暑くて品質の良いネギの出荷が少ない東京市場等府県市場への進出を考えるのもおもしろいことではな

いだろうか。(園芸科・技師)